【論　文】

ラ・ロシュフコー『箴言集』の成立と発展（その二）

――オランダ版から初版へ――

吉川　浩

（承前）[注(1)]

一六六三年末か翌六四年初め、オランダ版が出ると、ラ・ロシュフコーは直ちに『箴言集』を自分の手で編纂しようと決心したようだ。早くも六四年一月十四日に国王から出版の允許をとっている。同年二月六日、彼はまだオランダ版を入手していなかったらしいが、ジャック・エスプリの兄、トマ・エスプリ（Thomas Esprit）に、次のように心境を書き送っている。

「世間の人は箴言集のことで少し騒ぎ過ぎです。こう言っても許してもらえるでしょう。そんなに騒ぐ必要も、それだけの値打もありません。今まで為されてきた追加や改変がそこに加えられているかどうか、私は知りません。箴言集が私の知っている通りのものなら、[2] 世間の人はそれをそんなに危険視しないで我慢してくれてもよさ

そうに思います。まだ順序も始めも終りも与えられていない代物ですし、さまざまの思索の寄せ集めでしかないのですから。雑な表現も幾つかある筈ですし、出来ればもっと推敲したかったのです。あなたの身内の方とあなたの友人[3]の間で秘密のままにしておくべきものが、こんな風に公表されようとは思ってもみませんでした。ところで、二人の構想としては、以下のことを立証したかったのです。古代異教徒哲学者たちの美徳がいま大いにもてはやされているけれども、その考え方は根本的に間違っているということ、人間は自分が価値ある存在のように思い込んでいるけれども、信仰心がなければ、そこには美徳の見せかけしかなく、他人の目をくらまし、しばしば自分自身も見誤ってしまうということです。私は、人間に満ちあふれている滑稽な自尊心を打ちくだき、何事につけキリスト教によって支えられ、立て直される必要があることを示すためなら、いくら人間の心の貧困と矛盾を言い立てても言い過ぎではないと思えるのです。問題の箴言集はだいたいこの方向に沿っているのですし、私はそれらが罪あるものとは思えないのです。なぜなら、これらの箴言の目的は自尊心を攻撃することにあるのですし、御承知のように自尊心には情け容赦は要りませんから。ところで、これらの箴言集が完成を待たず、当然あるべき順序も持たないまま世に出たのはまずかった、という意見には私もその通りだと思います。が、今さらこういうことをとやかく言っていても始まりません。われわれはまず次が真実か否かの検討に入りましょう。それは、ある種の美徳の組織には悪徳が入り込んでいる、あたかも医薬品の成分に毒が入っているように、というのです。私がわれわれという時、それは人間という意味です。自分の善はただただ自分の力のお蔭だと思い込んでいる人間です。古代の偉人たちがまさにそうでした。アレキサンドルや他のもろもろの人達の高邁さや度量には、自尊心や不正やその他あまたの含有物が入っていると思いますし、カトーの勇気の中には粗野とカエサルに対する多分の嫉妬や憎悪が入

っています。アウグストゥスのシンナに対する仁慈には、過去の失敗を何とか取り返したいという欲求、無益に大量の血をまき散らしてしまったことへのおぞましさ、さまざまの事件への恐怖が隠されています。世人はこういう心の襞を読もうとはせず、美徳という名を被せているのです。これ以上、あなたにこういうことを言うのは止めます。私はここでマニフェストをやらかすつもりはありません。折りを見て、あなたはあなたの御判断をリアンクール夫人とプレシス夫人にお伝え下さい。また、よろしければ、今お話しているものをベルナール氏からド・ラ・シャペル氏にお見せ下さるようとり計らって下さい。リアンクール夫人には私から手紙は書かないでおきます。このことで彼女を悩ませたくはありませんから。」(4)

くどくどしい弁明に終始している手紙だが、これは『箴言集』初版の成立事情を知るうえでまことに貴重な資料となった。ここから次のことが読みとれるであろう。この手紙を書いた一六六四年二月六日現在、ラ・ロシュフコーの手にオランダ版はまだ渡っていなかった、ただし、彼はオランダにおける偽版出版の事実はすでに知っており、それが社交界の評判となり、さまざまの雑音をともなって彼の耳にも聞こえて来た、著者はその騒ぎにいささか狼狽し慌てている、等々。

ラ・ロシュフコーのために代弁を続ければ、彼自身は写本を印刷し出版しようなどという大それた意図は持たなかった、それは未完成の未熟な作品であって、まだ一冊の本としての構成や体裁を整えてはいない、世人はこれを当代批判や実在人物への弾劾と受取っている節もあるが、自分はただ古代の偉人たちの美徳の虚偽を曝露し、異教徒哲学者の人間観を批判する以外に他意はない、この書物は普遍的本質的な人間性を考察しているのであって、究極の目的は人間に自己過信を捨てさせ、キリスト教的徳目の価値を教えることにある、等々となろう。要するに、これは決し

て世人の思うほど危険な書物ではない、と訴え続けている。

文面にはラ・ロシュフコーの困惑と狼狽が手に取るようだ。火をつけたのはラ・ロシュフコーであり、風を送ったのはサブレ夫人やジャック・エスプリであったが、彼らの想像以上に火は激しく広く燃え上ったのだ。今は逆に水をかけ、周囲の燃え易いものを取除かねばならなかった。火を加減し、鎮めておかないと、それは逆風に乗ってこちらに飛び火する危険があった。

注（1）「ラ・ロシュフコー『箴言集』の成立と発展」（その一）――写本から版へ――。『本誌』第三十六号所収。

（2）文面を素直に読めば、この手紙を書いた時、ラ・ロシュフコーはまだオランダ版に目を通していないということになる。自分はオランダ版出版に全く関与していないという立場を明示しておきたかった、と考えられる。

（3）トリュシェの注によると、〝身内の方〟とは明らかに弟のジャック・エスプリを指すし、〝あなたの友人〟はラ・ロシュフコー以外に考えにくい、としている。なお、トリュシェはこのあたりの記述から、オランダ版の底本となった写本をオランダの出版社に流したのはジャック・エスプリであろうと推測している（《Ed. de Truchet》, P. 578, Note 2）。

（4）Ibid., P.P. 577～579, Lettre 39.

火とは当代に対する激しい怨恨と憎悪であった。写本には、すなわち、オランダ版には、実人生の戦いに敗れた者の失意、時代の流れにとり残された者の憤懣があまりにもあらわであった。

いまオランダ版巻頭の箴言をそのままの順序で読んでみよう。

（注1）[1] "Les vices entrent dans la composition des vertus, comme les poisons entrent dans la composition des remèdes de la médecine : la prudence les assemble et les tempère, et elle s'en sert utilement

contre les maux de la vie."

「美徳の組織の中には、悪徳が入っている。あたかも、薬の成分に毒物がまじるように。用意周到な知恵は両者をかきまぜ、薄めておき、苦しくなると、うまくこれを用いる。」

[2] "La vertu des gens du monde est un fantôme formé par nos passions, à qui on donne un nom honnête pour faire impunément ce qu'on veut."

「世人の美徳はわれわれの情念が作り上げた幻だ。しかつめらしい名前をつけ、それにかこつけて、やりたいことを大手を振ってやろうというのだ。」

[3] "Toutes les vertus des hommes se perdent dans l'intérêt, comme les fleuves se perdent dans la mer."

「人間のあらゆる美徳は利害のなかに消え失せる。あたかも、河が大海のなかに消えて行くように。」

[4] "Les crimes deviennent innocents, même glorieux, par leur nombre et par leurs qualités; de là vient que les voleries publiques sont des habiletés, et que prendre des provinces injustement s'appelle faire des conquêtes. Le crime a ses héros, ainsi que la vertu."

「犯罪は無実となり、栄誉とさえなるのだ。数次第、やり方次第で、公然たる窃盗が手腕とされ、不法に諸州を奪うことが征服と称せられる。犯罪もまた、英雄をかかえている。美徳と同じように。」

[5] "La honte, la paresse, et la timidité ont souvent toutes seules le mérite de nous retenir dans notre devoir, pendant que notre vertu en a tout l'honneur."

「恥辱、怠惰、臆病だけが、往々にしてわれわれを義務の中に閉じ込める。そうこうしているうちに、美徳なるも

のがしゃしゃり出て名誉を横取りしてしまう。」

[6] "Si on avait ôté à ce qu'on appelle force le désir de conserver, et la crainte de perdre, il ne lui resterait pas grand'chose."

「力と称されるものから、保持する欲望と失う恐怖を除いたら、あとに大したものは残らない。」

[7] "La clémence est un mélange de gloire, de paresse et de crainte, dont nous faisons une vertu; et chez les princes c'est une politique dont ils se servent pour gagner l'affection des peuples."

「仁慈とは、栄光と怠惰と恐怖の混交である。われわれはそれを美徳としてしまったのだ。だが、王侯にとって、それは民衆の人気とりに用いる政策なのである。」

一つひとつの箴言に猛烈な毒がこもり、配列の順序にも当代への反感と呪詛がみなぎっていた。オランダ版は人生の挫折、歴史の疎外にもがく者の憤怒と復讐の書であった。巻頭箴言（maxime-vedette）から二番三番までは一見抽象的な美徳悪徳論であったが、オランダ版のこの順序に従って読めば、それらは四番や六番七番の統治論、政治論とからまり、痛烈な当代諷刺、権力批判の前衛となって働いた。普遍的美徳攻撃が当代権力者や体制派の虚飾と狡猾を衝き、国家権力を批判する武器として役立った。オランダ版は美徳攻撃に名を借りた特定人物の弾劾と時代諷刺の要素を多分に含んでいた。これら箴言群の窮極の目的は、抽象的な美徳批判にあったのではなく、当代の権力批判と時代諷刺に置かれていたことは明らかであろう。

巻頭がこのままであれば、八番以下の抽象的人間性分析もそれぞれ実在人物や具体的事象と結びつき、著者にその

反動が帰ってくる恐れも充分であった。

同時代の人々は、のちにラ・ブリュイエールの『レ・カラクテール』を読みながら盛んに行ったように、ラ・ロシュフコーの『箴言集』についても、その記述を当代の人物や出来事と結びつけて解く鍵（clef）を持っていた。[2] オランダ版の随所に著者を裏切った者への憎悪がちらついていたし、時代の流れに置いて行かれた著者の失意が漂っていた。オランダ版は個人的怨恨という臍の緒が未だ生まなましくくっついたままの版であった。

写本として仲間うちで回し読まれる間はそれでよかった。サブレ夫人も周縁の人々も皆時流からとり残され、粗野な成上り者のはびこる宮廷に反感を持つ人達ばかりであったから。彼らは『箴言集』を読み、時の権力に向けられた痛烈な諷刺と弾劾にひそかに共感し、共鳴し、溜飲をさげ、暗々裡に拍手喝采を送っていた。写本やオランダ版の成功には確かにこういう生臭い要素もからんではいた。しかし、それが本になり、騒ぎが大きくなると話は別であった。

一六六四年当時、ラ・ロシュフコー公爵と宮廷の関係は微妙であった。[3] ほぼ十年にわたる追放と蟄居を終え、一六六二年一月一日、ラ・ロシュフコーは国王から Saint-Esprit 勲章を拝領し、息子の Charles も国王の軍隊に戻り、名誉の傷を負っていた（六四年）。返逆者の烙印をやっとはがし、公的にも国王の赦免を得、父子とも国王の寵臣に復帰したばかりの時であった。[4]

勝利を不動のものにした王権派のアメとムチ両用政策のお蔭でようやく得られた静謐であった。アメはまたいつムチにとって代るか知れたものではなかった。今、写本がそのまま大量に印刷され旧敵を刺戟することは避けねばならなかった。かつての敵は半世紀かけて進めてきた中央集権化を完成し、国王の絶対主義体制を不動のものにしつつあっ

た。その得意と安堵から旧敵ラ・ロシュフコー公爵にも勲章と年金を与えたが、公爵はこれを〝仁慈〟とは受取らず、あろうことか、箴言の中で〝人気とり〟と冷笑していた。王権派にとって、国王が地方に知事（Intendant）を送ることは国家の官僚機構を整備することに外ならなかったが、封建領主の末裔ラ・ロシュフコー公爵はこれを「諸州を不法に奪うこと」と公言し、「公然たる窃盗、犯罪行為」と弾劾していた。

『箴言集』の冒頭にこういう猛毒を含む箴言を置いておくのは危険であった。復讐の喜びが無いではなかったし、仲間うちでこっそり敵をからかっている間はそれでもよかったが、限度はわきまえねばならなかった。[5]『箴言集』をラ・ロシュフコー自らの手で本として世に出すときは、オランダ版に立ちこめている猛烈な毒気を急いで抜かねばならなかった。個人的怨恨や当代への反感という生々しい臍の緒を断ち切らねばならなかった。[6]

注（1）オランダ版には数字標記はついていない。これはトリュシェ版における仮標記である。

（2）大作家叢書版には箴言の記述を当代の人物や出来事と結びつけて解説した注が多いし、Dreyfus-Brisac には《La Clef des Maximes de La Rochefoucauld》という著作もある。

（3）"Les amitiés renouées demandent plus de soins que celles qui n'ont jamais été rompues."《Ed. de Truchet》, Maximes Postumes 57）「結い直された友情は、破れたことのない友情より何かと手間がかかる。」

（4）十数年前の著者の立場を生々しく想起させる箴言は初版から削除された。"L'intrépidité doit soutenir le cœur dans les conjurations, au lieu que la seule valeur lui fournit toute la fermeté qui lui est nécessaire dans les périls de la guerre."（《Ed. de Truchet》, Maximes Supprimées 40）「陰謀を企てるに際しては向う見ずの大胆さが心を支えるが、戦いにおいて危機に瀕した時、精神の強さを生み出すのは勇気をおいて外にない。」この箴言はリアンクール手稿からオランダ版まで存在したが、初版の時に削除され、著者の生前採録されることはなかった。大作家叢書版もトリュシェ版もともに、ラ・ロシュフコー父子がルイ十四世の寵臣に復帰したあと、フロンドの乱におけるラ・ロシュフコーの役割を生々しく想い出させる

この箴言は不適当と考えられたのだ、と注をつけている。

（5）　オランダ版にのみ載せられた次の二つの箴言がラ・ロシュフコーの当時の心境を垣間見せている。

[152] **La raillerie est une gaieté agréable de l'esprit, qui enjoue la conversation, et qui lie la société si elle est obligeante, ou qui la trouble si elle ne l'est pas.**

「からかいは、才気の楽しい遊びで、会話を愉快にする。ところで、それは好意を含んだものならつき合いを深めるが、そうでないとつき合いを乱す。」

[154] **C'est toujours un combat de bel esprit, que produit la vanité ; d'où vient que ceux qui en manquent pour la soutenir, et ceux qu'un défaut reproché fait rougir, s'en offensent également, comme d'une défaite injurieuse qu'ils ne sauraient pardonner.**

「それはいつの場合でも虚栄心が生み出す才気の争いである。言い返す才気のない者や痛い所をつかれて赤面した者は屈辱的敗北を喫した、とばかりいきり立つ。彼らはそれを許せないのだ。」

（6）　オランダ版巻頭に配列されていた当代政治批判や人物諷刺と受取られかねない箴言は初版において奥の方に隠された。四番は目立ちにくい一九二番へ移され、六番は全文削除、七番は二つの箴言に分割、毒を薄められて十五番、十六番に配置替えされた。初版において最も早く顔を出す人物論は古代のアウグストウスとアントニウスに関するもの（第七番）である。

写本から初版へ、何をどう変えるべきか？　指針は幾つかあった。サブレ夫人が収集してくれた数多くの箴言集批評にそれは明示されていた。ところで、評価は大きく分れていた。一方では、執拗な美徳攻撃に辟易し、こうまで著者が人間の弱さ、醜さにこだわるのは彼自身の悪しき人柄によると突き放す意見もあった。

「……昨日は頭痛がしたので箴言集の初めだけしか読んでいないのですが、私のみるところ、それは真実に基づいているというより、著者の気質に依るところが大きいように思われます。と申しますのは、著者は利欲のともなわない恩恵や憐憫の存在を信じていないのですから。彼は他の皆んなを自分自身と同じように判断しているので

す。大多数の人は彼の言う通りです。しかし、善を為すこと以外に何も望まない人々もたしかに存在します。[注(1)]……」

他方、著者の人間観に全面的に同意し、厳しすぎる人間性批判は、人間の自己に対する自惚れを打ち砕き、人間をキリスト教信仰へ向わせる、と評価する意見もあった。

「……私の意見では、これはかつて無い、最もすぐれた、最も有益な哲学です。これは、古代や近代のあらゆる流派の賢明で良質な全ての要約です。この著作を良く知れば、誰しもも早やセネカやエピクテトスもモンテーニュやキャロンも、さらには最近集められた懐疑論者やエピクロス学派のモラルも読む必要はありません。あとのこういう本によって人は自分を知ることを学ぶのですが、それは自分を高貴にし、自分で自分を好きになるためです。一方、こちら（ラ・ロシュフコーの著作）はわれわれを知らせてくれますが、それはわれわれを軽蔑し、われわれを恥ずかしく思うことを学ばせるのです。それはわれわれに自分自身に対する不信の念を抱かせ、われわれ自身を警戒させます。われわれに関係のある全て、われわれを取り巻く全てに不信と警戒を与えるのです。これはこの世の全てに嫌悪を抱かせ、われわれをそこから切り離し、神の方へ向わせます。唯一、良く、正しく、不変で、愛され、敬われ、仕えられるにふさわしい存在である神に。あなた[2]の哲学が終るところからキリスト教徒は始る、と申せましょう。カトリック教の初心者にとって、自分の精神と意志を神の方へ転換させること程適切な教訓はないのではないでしょうか。……[3]」

両極の意見を踏まえて、サブレ夫人は Schonberg 夫人に、箴言集を印刷して本にすべきかどうか、直截に打診したらしい。尋ねられた方の答も屈折している。

「昨日は一日中あなた[2]の箴言をお返ししようと思っていたのですが、あいにく時間がありませんでした。手紙を

書いて私の意見を聞いていただこうと考えていたのです。いまも私の気持を事細かに申し述べる余裕はありません。大よそのところを申します。この著作には才知があふれています。しかし、優しさには欠けるように思われます。この人が私に見せつけてくれなかったら生涯気づかなかったであろうような数々の真実が述べられているとは思います。が、しかし、私はまだ人間の信義も善も誠実も認めない、こうしたものの考え方にはついて行けません。私はこれらは当然存在すると思っておりました。しかしながらこの著作を読んだあとでは、悪徳も美徳もあったものではない、どうせ人間は生きている限りやりたいことを全部やってしまうのだ、と思い込まされてしまいます。こういう風にわれわれは欲望を全く阻止できないようにできているというのであれば、われわれは許されて当然ということになってしまいます。これらの箴言がいかに危険極まりないか、あなた様もおわかりですね。なお、私にはこれはフランス語として良く書けているとは思えません。これは作家の文章というより、むしろ宮廷人の文章であり、その語り口なのです。それが私の気に入らないというのではありません。踏み込んで申しますと、私にはこれらの箴言がどれもこれもまるで私が書いたようによくわかるのです。わかりにくい点があると言う人も多いですけれど。……中略……

これが、写本の時のように、印刷して成功するかどうか、私にはわかりません。が、もし、私が著者に忠告する立場なら、私はこういうひそか事は世に出さないようにする、と申します。そんな事をすれば世の人が彼に抱いている信頼を永久に失ってしまうでしょうから。その辺のことは彼が充分心得ています。彼がそんなに鋭い人ということがわかってしまえば、彼は二度と再びこの上なく有利な立場、彼がそういう才能の持主とは思われていないという今の立場を利用できなくなるのですから。……」[4]

ラ・ロシュフコー公爵の痛烈で仮借ない批判や弾劾は写本の段階で止めておくよう忠告していた。いかにも仲間うちらしい、親身の助言であった。しかし、オランダ版がすでに世に出た今、箴言集を仲間うちだけのものにしておくことは最早不可能であった。一刻も早く内容を改めて世に出すしかなかった。

著者は思想を変える必要はなかった。ションベール夫人をはじめ多くの手紙は、余りに手厳しい美徳攻撃にショックは受けたが、著者の人間観を正しく理解していた。思想ではなく表現を改めさえすれば良かった。生々しく性急で執拗にすぎた美徳攻撃を、抽象化し普遍化し、時空を超えた永遠の真実へ近づけること、個人的体験を引きずった怨嗟や憎悪や独断を捨象し、普遍的真理に昇華させること、要するに、旧敵をも黙らせるに足る永遠と普遍の提示が求められていた。

「この前お目にかかりました時、私は例の箴言集の小冊子を一部分だけしか持っておりませんでした。それは美徳に対するあまりに手厳しい攻撃で始まっておりましたので、不快な気持になりました。ほかの多くの箴言についても同様でした。ですが、全部を読んでみて、いま私はあなた様の評価を認めないわけにはいかなくなりました。今ではこの著作の中にはなかなか結構なこと、いやむしろ正しいことが書かれていると納得できます。ただ、真の美徳を偽りの美徳と取り違えさせる、誤解を招く表現だけは取り除いてほしいと思います。私の友人の一人は幾つかの箴言のある言葉をさし替えました。これで工合の悪いところが修正されたと存じます。もしお会いいただけますなら、いずれ近いうちにあなた様にそれらを読んでお聞かせ致しましょう。」(5)

箴言というジャンルは、いわば思想や体験を共有する文化サークルの〝共同体の文芸〟として成長していった。誰かによって与えられた一つの箴言に、読者も参加して意見を述べ、互いに手を加え、グループの皆んなで納得できる

内容と表現に仕上げて行く。ラ・ロシュフコーの箴言はそういう協同作業の成果でもあった。それは〝座の文学〟としての一面も持っていた。

さぞかし、後日リアンクール夫人はサブレ夫人の面前で、ラ・ロシュフコーの辛辣さを修正し、表現を和らげて、自己流のラ・ロシュフコー箴言集を読み上げたことであろう。ラ・ロシュフコーはこれらさまざまの意見をふまえながら、すでに書き溜めた三百数十の箴言について総点検を開始し、取捨選択と推敲を重ねていった。

注（1）《Ed. de Truchet》, P. 570, Lettre 32, Lettre de Mme de Guymé à Mme de Sablé, 1663.

（2）（2′）これら二つの例に見られるように、サブレ夫人宛の返書には、明らかにラ・ロシュフコーの箴言について批評を述べながら、それを「あなたの箴言」とか「あなたの哲学」と呼び、あたかもサブレ夫人の作品であるかのように表現した箇所が多い。初期の段階においては、これらの箴言がラ・ロシュフコー、ジャック・エスプリ、サブレ夫人の共同作品、あるいは共有の思想として相手方に手渡され、向うもそのように理解していたことを示している。ラ・ロシュフコー自身もかつて自分の箴言集を notre volume（われわれの集）と呼んでいたのと符合する（前稿十九ページ参照）。

（3）《Ed. de Truchet》, P. 573, Lettre 35, Lettre, d'auteur inconnue, à Mme de Sablé, 1663.

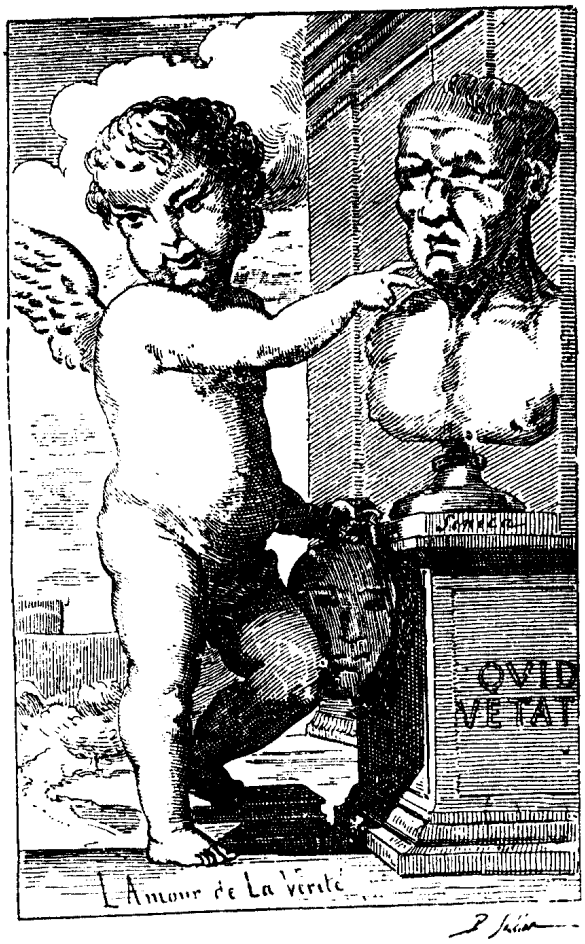
（4）Ibid., P. 564, Lettre 30, Lettre de Mme de Schonberg à Mme de Sablé, 1663.

（5）Ibid., P. 570, Lettre 33, Lettre de Mme de Liancourt à Mme de Sablé, 1663.

初版を編纂するに当って最も大きな課題はいかなる秩序のもとに箴言群を並べるか、であった。初版の序文（Avis au lecteur）は、オランダ版を「悪しき写本」ときめつけ、「一つひとつの箴言は主題別にタイトルを持ち、それらがより大きな秩序のもとに配列されることが望ましかった」[注(1)]と述べている。「より大きな秩序」とは、写本の時代に

見られなかった、初版の新しい編集理念に外ならなかった。箴言集を復讐と弾劾の書から人間探究の書に変えることであった。初版の配慮はこの一点に集中された。オランダ版は全面的に解体されて新しい理念のもとに再構成されて行った。

初版の巻頭には風変りな口絵が添えられている。天使が舞い下りて来て、右手で男の胸像を指さしていた。左手は仮面をぶら下げている。胸像の男の仮面が剝ぎ取られたのだ。仮面は若々しく微笑をたたえていたが、男の素顔は醜いしかめっつらだ。台座には Seneca と書かれている。天使の下方には L'Amour de la Vérité と添書され、セネカの胸像はより大きな別の台に載っかっている。そこには QVID VETAT[2]（何が邪魔か）と刻字されていた。



FRONTISPICE DES PREMIERES EDITIONS DES MAXIMES.

口絵はあとに続く箴言集の絵解きであった。箴言集を当代批判や実在人物への弾劾と読みかねない読者に向って、これは反セネカの書である、と宣言していた。セネカ流の人間理性への過信は、人間に自己の真実を見誤らせる、セネカの古くさいお説教に代ってこの箴言集は人間のあるがままの姿をお見せする、セネカの人間観と私のそれと、どちらが正しいとお思いか、どうぞ比べていただきたい、と読者に呼びかけていた。

口絵に続いて、大要次の序文が付された。

「先年、質の悪い偽版がオランダで出てしまったので、止むなく本書を公刊するに至った。この箴言集には、自尊心に毒された人たちにとっては我慢し難い真実の指摘があるので、必ずやこれを誹謗する者が現れるであろう。そこで私は先手を打って、私を弁護してくれる読者の手紙を掲げておく。この箴言集は初期キリスト教会の教父たちの思想と一致する。もしこの本を断罪するというのであれば、すなわちそれは教父たちの意見を処断することだ。賢明なる読者はゆめゆめそんな大それた行為に加担なさらぬよう。いささかお気に障るところがあっても、箴言集は人間一般を対象にし、特定の個人を標的にしてはいないのだから、自分は例外とお考えになるがよろしかろう。……」

二十数年後、ラ・ブリュイエールが『レ・カラクテール』に付した序文と良く似ていた。[3] 両者とも、自分の著作が当代批判として読まれることを恐れ、対象はあくまで人間一般であり、普遍的人間性であって、特定の個人ではないと断っていた。ラ・ブリュイエールも『レ・カラクテール』の要所に〝避雷針〟[4]を設け、予想される弾圧をかわそうとしたが、ラ・ロシュフコーの避雷針は聖アウグスチヌスや聖パウロという大樹であったと言えようか。

次の「私を弁護する読者の手紙」[5]は著者自身の序文に十倍し、サブレ夫人を中心とするジャンセニスト・グループの意見を集大成していた。ラ・ロシュフコー発トマ・エスプリ宛書簡をはじめ、既出のションベール夫人やリアンクール夫人の手紙など全ての箴言集擁護論から最大公約数を引出していた。

要約すれば、

「『箴言集』は、一見、全ての美徳を破壊しているようだ。が、著者の目的は美徳破壊にあるのではない。彼はわれわれに人間の現実を認識させようとしているのだ。この世に完全な純粋さが無い以上、われわれの大方の行為に

も、真実と虚偽、完全と不完全、美徳と悪徳が入り混じっている。著者は人間性の善を否定し、人間の醜悪な面を見せつけるが、この手法は聖アウグスチヌスや聖パウロなど初期教会の教父たちと同じである。

人間の理性は信仰の光に導びかれるのでなければ、傲慢となり、あらゆる悪の根元となる。その典型的な例がセネカである。著者が攻撃するのはこういう自尊心に毒された腐敗せる人間なのであって、彼の思想はキリスト教的人間観に合致する。理性の力で美徳を積んでいけるとする考え方が人間を盲目にしている。彼が描いたのはこういう盲目の人間の悲惨さなのである。

文体は、作家としてより宮廷人の気楽な書き方、学者的な規則正しい書き方というより素人の気ままな書き方だが、読者は箴言というものの正しい読み方を心得てほしい。箴言には意味と表現に曖昧さがつきまとう。なぜなら、それは簡潔な文体で書かれねばならないし、長い説明は許されないからだ。それは、まだ色もついていない絵画の最初のひと筆のようなものだ。しかし、それが巨匠のタッチなら、目利きの人はたったそれだけで、絵の美しさ、画家の思想の全てを見てとってしまう。読者は箴言に込められた深い意味、強い力を汲み取ってほしい。

『箴言集』には一般化が過ぎる、ある人にしかない欠点を人類全体に拡散している、ちょうど黄疸にかかった人が外界の全てを黄色く見るようなものだ、こういう非難があることは承知しているが、一般化は言葉の綾である。箴言において、断定は塩であり、力である。パリ中がとか宮廷全体がとか言っても、それはパリや宮廷の大部分は、という意味であって、著者は例外の存在を認めている。それなのに、自分はここに描かれているようではない、といって怒るのも、これらの箴言が人の心の最も感じやすい部分に鋭くつきささるからだ。

さまざまな読み方があろうが、私はこの箴言集は似非賢人の嘘偽と愚劣を見事に描き切ったと考える。真実への

愛が似非賢人の仮面を剝ぎ、その素顔を見させたのだ。これらの箴言は人間を完全に知り、完璧に描き得る巨匠の教訓だ。人間がこの世で演ずるあらゆる役柄を見事に見分け、劇中人物の性格の相違を教えるのみならず、幕の裾をからげ、同じ役者が別の劇で違った役を演ずるところまで教えてくれる。

当代これ程人間を軽蔑させ、わが身の虚栄を恥じさせる本はない。開くや否や、私は自分の心が見透かされ、真実を指摘されてくやしい思いに陥り、顔を赤らめる。この本を読んで、賢くはならぬにしても、少くとも自分は賢くないのだということだけはしっかり学べる。これによって自分自身を知り、愚かな美徳讃美にふけらずにすむ。偽善者にとって、この手の本はなかなかに読みづらい。読者よ、この本の悪口を信ずる勿れ。他人にも自分にもその正体を隠しておきたい輩のみこの本を悪しざまに言うのだ。」

ラ・ロシュフコーの周りに、周縁の貴夫人たち、さらには聖アウグスチヌスや聖パウロまで動員して、人垣を築いていた。まこと賑々しいラ・ロシュフコー親衛隊の結成であった。『箴言集』という城を築くに当って、著者はまずその周りに、二重三重に濠をうがち、敵の侵攻に備えねばならなかった。

注（1）“……une méchante copie……” “……il eût été à désirer que chaque *maxime* eût eu un titre du sujet qu'elle traite, et qu'elles eussent été mises dans un plus grand ordre;……”

（2）Horace: “Ridentem dicere verum quid vetat?” (Sat., I, 1.) “Qu'est-ce qui empêche de dire la vérité en riant?”
「微笑みながら真実を語るを何が邪魔するのか？」（《Ed. de Truchet》, P. XLI, Note 1.）

（3）ラ・ブリュイエールの『レ・カラクテール』の序文に次の言葉がある。
“……bien que je les (les caractères) tire souvent de la cour de France et des hommes de ma nation, on ne peut pas néanmoins les restreindre à une seule cour, ni les renfermer en un seul pays, sans que mon livre ne perde beaucoup de

son étendue et de son utilité, ne s'écarte du plan que je me suis fait d'y peindre les hommes en général,……"「私は人物をしばしばフランスの宮廷やわが国の人々の中からとっているが、それを一つの宮廷だけに限ったり、一国の中だけに閉じ込めたりしてはいけない。それでは私の本が広がりと効用を大いに失うことになるし、私が普遍的な人間を描こうとした意図からも離れることになる。」

(4) ラ・ブリュイエールは『レ・カラクテール』において辛辣な当代批判を展開したが、"Un homme né chrétien et Français se trouve contraint dans la satire; les grands sujets lui sont défendus;……" (CH. I. 65)「キリスト教徒で、かつ、フランス人として生れた者は、諷刺を書くにも制約を受ける。大きな主題は彼に禁じられている。」と嘆いていた。彼は『レ・カラクテール』の中心 (CH. X. 35) に心ならずもルイ十四世への讃辞を置き、最終章 (CH. XVI) は敬虔な宗教論でしめくくった。このような時代権力への慎重な配慮をサント・ブーヴは "paratonnerie" (避雷針) と呼んで同情している。(Sainte-Beuve: 《Les Grands Ecrivains Français, XVIIe Siècle, Philosophes et Moralistes》, P.P. 188〜9, Ed. Garnier.)

(5) *Discours sur les Réflexions ou Sentences et Maximes morales.* 著者は Henri de La Chappelle Bessé (1625年頃〜1694)。弁護士で、一六六八年ボワロの姪と結婚(《Ed. de Truchet》, P.264)。さきのトマ・エスプリ宛書簡の末尾に彼の名が出ている。この弁護論は勿論ラ・ロシュフコーの依頼によって書かれたものである。

箴言集本文の冒頭には、自己愛をめぐる長い省察が据えられた。これは五年前の一六五九年、Charles de Sercy 編《Recueil de pièces en prose, les plus agréables de ce temps, composées par divers auteurs》にすでに発表され、いわば検閲ずみで公認の普遍的人間論であった。オランダ版巻頭の美徳悪徳論に仮託した当代批判は影をひそめ、初版には続けて二・三・四番にも自己愛をテーマとする箴言が配列された。

(2) "L'amour-propre est le plus grand de tous les flatteurs."

「自己愛はあらゆるおべっか使いのうち、最もしたたかだ。」

（3）“Quelque découverte que l'on ait faite dans le pays de l'amour-propre, il reste bien encore des terres inconnues.”

「自己愛の領土で、たとえいかなる発見があったにせよ、まだそこには知られざる大地が残っている。」

（4）“L'amour-propre est plus habile que le plus habile homme du monde.”

「自己愛は、この世で最も油断ならぬ人より、もっと油断がならぬ。」

こうして初版は自己愛をメイン・テーマとすることが巻頭の配列からも示された。普遍的人間論なら誰はばかることもなかった。ラ・ロシュフコーもモンテーニュ流に、[注(1)]「私がわれわれと言うとき、それは人間について語っているのです。」とさきのトマ・エスプリ宛書簡で述べていた。トリュシェも指摘するように、[(2)]ラ・ロシュフコーの「われわれ」はモンテーニュの「私」と極めて近かった。それは人間の普遍を意味していた。古代の偉人も当代の権力者も、時流に乗った者も後れた者も全て同じ「われわれ」であった。二千年前のアレクサンドルも現在の王侯も、汝も我も皆同じ「われわれ」であった。この「われわれ」の自己愛を私の箴言集は追究する、初版の巻頭はこう主張していた。

一方、政治権力と並んで、能う限り避けたい、いま一つの勢力があった。宗教界であった。ラ・ロシュフコーは初版の編纂に当り、リアンクール手稿からオランダ版までの各所に点在した神と宗教への言及を全て削除している。トリュシェの指摘によるとそれは九ケ所にのぼる。[(3)]こうして初版からは、Dieu（神）、Providence（神慮）、création（天地創造）、charité（愛徳）、péché original（原罪）、diable（悪魔）といった宗教的神学的ヴォキャブラリーは消されてしまった。箴言内容が反宗教的であった訳ではないし、用語が不用意であったとも思えないにもかかわらず、

まるで、さわらぬ神にたたりなし、と自らに言いきかせでもしたように、ラ・ロシュフコーは初版編纂時に、自らが検閲官となり、写本には存在した神学用語を一掃してしまった。(4)

ところで、これと裏腹に、ただ一つだけ例外がある。次の箴言は他のいかなる写本にも版にも無いのに、初版にだけわざわざ付加されたものである。

(225) "Quelque incertitude et quelque variété qui paraisse dans le monde, on y remarque néanmoins un certain enchainement secret, et un ordre réglé de tout temps par la Providence, qui fait que chaque chose marche en son rang, et suit le cours de sa destinée."

「この世がいかに転変常なく見えようと、そこには、やはり、ある種の目に見えない連係と、常に神意によって整えられた秩序が存在する。万物は、神意のまにまに整然と進み、自らの運命をたどって行く。」

くり返し指摘するが、これは初版に至るまで全ての写本やオランダ版に存在せず、突如、初版にだけ出現し、あと二版から五版までいかなる版にも二度と採録されることはなかった。初版のためだけに準備されたとしか考えようがないが、他の箴言と比べその内容の何と空虚で異質で孤立していることか。ここには他の箴言に充満する生気も毒気もない。ただひたすらキリスト教徒として無難で平板な感慨を連ねたのみである。いかにも取って付けたような、その代りジェズイットからもジャンセニストからも文句のつけようのない優等生の箴言であった。まぎれもなくこれは、当時の宗教界を意識して、用心深い配慮のもとに、わざわざ付け加えられた、ラ・ロシュフコー流の〝避雷針〟に外ならなかった。キリスト教徒対 libertin（自由思想家）、ジェズイット対ジャンセニストの深刻な対立や宗教論争にはかかわりたくなかったのだ。できることなら宗教のからんだ論争からは身をかわして通りたかったのだ。著者

は、自分が平凡で敬虔なキリスト教徒として認められるなら、それで充分であった。この箴言は、そのために提出されたパスポートであった。

たしかに、サント・ブーヴをはじめ、ヴィネやプレヴォ・パラドルなど十九世紀の批評家がこぞって指摘したように、[5] ラ・ロシュフコーにはジャンセニスムの影響が極めて強く、その人間観は当時のジャンセニストたちの最大公約数であったと言ってもいい。彼の思想はジャンセニスムと共通の基盤に立っているし、すでに見たように、彼はサブレ夫人を中心とするジャンセニスト・グループにおける箴言づくりのチャンピオンとして押し出されて来たのであった。『箴言集』はジャンセニスムを核とする思想グループ、文化サークルの共同作品としての一面を持っていた。

しかし、ラ・ロシュフコーが彼らと深く関わったのはあくまで思想形成においてであって、箴言の内容や表現についてグループの誰かが差し出がましく指図しようとしても、彼はそれを完全に無視している。当時のジャンセニストたちは個人の尊厳と権利を強く意識する反面、中央集権的な統制や絶対主義を忌避し、自由検討の精神にあふれていた。各自がそれぞれの信仰生活と宗教観に一家言を持ち、神学論争を好む傾向が強かった。ラ・ロシュフコーの箴言集にも基本的には理解と共感を寄せながらも、個々のテーマや用語については細かい注文をつける人も多かった。彼らは外に向けては頼もしい支持者であったが、内に向いてはうるさい小姑となった。一六六一年の写本時代に Maure 夫人は charité（愛徳）の理解について異議を唱え、[6] また、七〇年代の版に入ってからも Rohan 夫人が humilité（謙虚）をキリスト教的な真の美徳としてさらに賞揚するよう求めたが、[7] ラ・ロシュフコーはいずれも取り合わなかった。

神学論争を仕掛けられた時、ラ・ロシュフコーの取る態度は一貫していた。彼は決して論争には加わらず、挑発や

煽てに乗らず、ひたすら身をかわし、掛かり合いを避けるだけであった。charité についてけちを付けられると問題の文章は初版で削除してしまったし、[8] humilité に関しても、その頃 Rohan 夫人の意に適う箴言を三つも書いていたにもかかわらず、それを彼女に知らせもせず、後の版に発表もしなかった。[8] ラ・ロシュフコーは宗教論争には無関心であったし、『箴言集』の中に論争の種となりそうなものは一切残しておきたくなかったのだ。宗教論争からはひたすら身を避けること、これが初版以降ラ・ロシュフコーの動かざる方針であった。

宗教との関わり方において、ラ・ロシュフコーはパスカル型ではなく、デカルト型に近かった。宗教問題は能う限り自分から遠ざけ、掛かり合わないようにと心掛けた。ジャンセニスト・グループとの繋がりにおいても、ラ・ロシュフコーは彼らに、外からの誹謗に対する弁護者、外敵への盾、『箴言集』という自分の城を護る外濠になってほしかっただけであって、自らが彼らの尖兵となって無神論者やジェズイットと戦うことはまっぴらであった。

たしかに『箴言集』も、神なき人間の悲惨を描いたに違いはないが、それは信仰のプロパガンダとは全く無縁であった。ラ・ロシュフコーは人間の真実を観察し、分析し、描写することだけで満足であった。それをどう読み、あとどう生きるか、彼は読者にゆだねてしまった。『箴言集』は反宗教では決してなかったが、明らかに非宗教的著作であった。ジャンセニスムの信仰を広めるために無神論者やジェズイットに論争を挑み、護教論を展開するなどという大それた意図は、少なくとも箴言集の本文には全くなかった。彼はそれをシャペル・ド・ラ・ベセの序文に任せてしまった。ラ・ロシュフコーはパスカルのように人間を遠くへ引っぱって行こうとはしなかった。彼にとっては人間が面白かっただけである。『箴言集』は人間を描くことだけが目的であった。それは『パンセ』と違って全く laïque（世俗的）な著作であった。

注（1）モンテーニュ『エセー』第三巻、第二章〝後悔について〟

「他の人々は人間をつくる。私は人間を語る。しかも、きわめて出来損いの一個人をえがく。…中略…人間は誰でも自分の中に人間性の完全なかたちを持っている。」（原二郎氏訳）

（2）……l'un des pronoms les plus employés dans son livre est le *nous* (alternant avec le *on*, qui n'en est guère qu'un substitut plus discret), et il n'y a pas de très loin de ce *nous* au *je* de Montaigne : c'est le pronom de l'introspection.（《Ed. de Truchet》, P. XXXVI.）

（3）Ibid., P. XXIII, Note 5. M. P. 9, 10, 13, 22番は全文削除。決定版の9, 37, 65, 170および、M. S. 33番は部分修正。

（4）例えば、写本からオランダ版にかけて存在した次の箴言は初版で全文削除された。

[66] "Une preuve convaincante que l'homme n'a pas été créé comme il est, c'est que plus il devient raisonnable, plus il rougit en soi-même de l'extravagance, de la bassesse et de la corruption de ses sentiments et de ses inclinations."

「人間は今のようにつくられたのではないという揺るぎなき証拠は、人間が理性的になればなる程、自分の感情や性癖の無法、下劣、腐敗に赤面することからも分る。」

また、オランダ版の

[157] "Il n'y a que Dieu qui sache si un procédé est net, sincère, et honnête."

「ある行為が、清純、誠実、清廉であるか否か、それを知るのは神だけである。」

という箴言は、初版で

(178) "Il n'y a personne qui sache si un procédé net, sincère et honnête, est plutôt un effet de probité que d'habileté."

「清純、誠実、清廉なある行為が、抜け目のなさによるか誠実さの結果なのか、知る人はない。」

と修正され、神という語は削除された。

（5）Sainte-Beuve : *La Rochefoucauld*,《XVIIe siècle, Philosophes et Moralistes》, Garnier.

A. Vinet : *La Rochefoucauld*,《Moralistes des seizième et dix-septième siècle》, Chez les Editeurs.

Prévost-Paradol : *La Rochefoucauld*;《Etudes sur les Moralistes français》, Librairie Hatier.

（6）《Ed. de Truchet》, P.P. 562～3. Lettre 28, *Lettre de Mme de Maure à Mme de Sablé*, 1661.

(7) Ibid., P.588, Lettre 45, *Réponse de Mme de Rohan à La Rochefoucauld*, Période 1671～74.

(8) オランダ版八二番の箴言、

[82] "Les passions ont une injustice, et un propre intérêt, qui fait qu'elles offensent et blessent toujours, même lorsqu'elles parlent raisonnablement et équitablement. La charité a seule le privilège de dire quasi tout ce qu'il lui plaît et de ne blesser jamais personne."

「情念は不正を犯すし、それなりの利害も持つ。それは必ず人を怒らせ、傷つけるのだ。たとえ、情念が理性的かつ公正に喋っていてもである。Charité（愛徳）のみが、自分の好き勝手にほぼ何でも言い、かつ人を傷つけない特権を持つ。」

は、初版では後半の La charité 以下が削除され、次のように縮約された。

(9) "Les passions ont une injustice et un propre intérêt qui fait qu'il est dangereux de les suivre, lors même qu'elles paraissent les plus raisonnables."

「情念は不正を犯すし、それなりの利害も持つ。それに従うのは危険である。たとえ、それが最も理性的に見えようとも。」

また、オランダ版一三七番の自尊心をテーマとする箴言で使われていた charité という神学用語は、初版四一番では bonté（善良さ）という一般的な語に変えられている。

(8) 《Ed. de Truchet》. P. 86, Note 1. 書いたが発表しなかった箴言は M.P .35, 37, 38.

書物としてまとめるため『箴言集』初版にはさまざまな工夫がこらされた。さきに見た口絵と序文と読者の手紙は城を護る外濠であった。そこを渡ると本文の入口には奇怪な城門が聳えていた。百行に近い長大な自己愛論がそれであった。否応なく読者は、この門をくぐり、いきなり、そのおどろおどろしい、バロック趣味の、怪奇な装飾に圧倒され、眩惑される仕組みであった。くらくらする頭とふらふらよろける足どりで自己愛の領土へ導かれて行くと、そこには細い道が迷路のように四通八通していた。読者は道案内を頼りに一歩々々進んで行く。自己愛の千変万化の動きを追って、短い箴言はテーマ毎に四ないし十くらいずつまとめられていた。

巻頭の自己愛論四つのあと、情念論が九つ（五から十三番）続き、報恩と忘恩に関する箴言（十四番）と仁慈論（十五・十六番）がはさまったあと、節制論が五つ（十七から二一番）、不幸に対する他人の冷淡について（二二番）のあと、忍耐論が六つ（二三から二七番）連続していた。巻頭の長い省察はラ・ロシュフコー人間学の概論、あとに続く短い箴言はテーマ別各論であった。長短の取合せが絶妙であったし、メーン・テーマは自己愛の分析にあることが、さりげなく、しかし、明確に示されていた。

箴言のテーマ別集中と連続は説得と教訓の効果を生み出した。言うまでもなく箴言は簡潔で短い。断定的表現をとらねばならぬ。従ってそこには意味の曖昧さ、両義性がつきまとうが、同一主題を繰返すことによって、それを補い、説明と説得に代え、相手を論破できる。一つだけでは難解な、あるいは反撥を招きかねない言い切り表現が、重ねられ束ねられることによって、集中砲火と波状攻撃の利目を持つに至る。それは美徳に酔った人間の自惚れと、己れの行動の真の動機を知らない人間の無知に向って、一の矢、二の矢、三の矢を射掛け、これでもかこれでもかと読者を攻撃する。[注(1)]

一方、同一テーマの過剰と偏在を避けるため、適度の分散も計算されていた。自尊心論は三六から四一番までの六つと二一〇から二一二番までの三つというようにそれぞれのグループに分けられているし、恋愛論もまた七七から八七番までの十一と三〇〇から三〇五番までの五つに分割配置されている。説得の効果を狙って集中がはかられた反面、単調と退屈を避けて、箴言の配列は多様性と意外性の面白さも併せ持つよう配慮された。教訓的集中的配列と読者を楽しませるための文芸的分散的配列、この二つを縦糸、横糸として初版は編まれていった。plaire et instruire（喜ばれつつ教える）という古典主義的文芸理念に全く忠実な営みであった。

自己愛についての序論から始り、そのさまざまな働きを観察し分析し尽したあと、集の終りには死をめぐる長大な論述が置かれていた。それは、形態的にも内容的にも巻頭の省察と対を為し、箴言集の巻末をしめくくっていた。読者は、自己愛論の前門をくぐり、広大な自己愛の領土を駆けめぐったあと、死についての省察にたどりつく。人生の終りに必ず死があるように、箴言集を読み終えるには必ずこの後門をくぐらねばならなかった。(2)

いつ訪れるか知れない死、しかし、確実に待っている死について、われわれはあまりに不用意ではないか？　死を前にして生の意味、死の覚悟があらためて問い直されるように、巻末の省察は、読者に今まで読んできた箴言の理解を尋ね直していた。生死事大、あなたはどのように死を迎えるつもりか？　セネカをはじめ古代ストア派哲学者のように、あなたは今でもまだ人間の理性は死に打ち勝つほど強いとお考えか？　『箴言集』入口の序論は生をめぐる概論であったが、出口のそれは死をめぐる総論であった。読者はなかなかこの裏門から外には出にくかった。もう一度もとへ戻って、人間とは何か、人はどう生き、どのように死んでいくか、箴言集とともに考え直す仕組みであった。あと戻りする人のために、巻末にアルファベット順の Table des Matières（索引）が付けられていた。

Sur le Bonheur et le malheur.（幸不幸について）53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60,.

Sur la Fortune.（運について）62, 66, 67, 69, 70, 293.

Sur le Jugement.（判断力について）107, 116.

Sur l'Orgueil.（自尊心について）36, 37, 38, 39, 40, 41, 210, 211, 212.

テーマとそれに見合う箴言番号が整理され、ある主題に関する箴言はどこを読めばいいか、一目瞭然であった。初版は、形態においても内容においても、集として、一冊の本としてまとめるために、最も行き届いた配慮が払われた

版であった。(3)

箴言は一つひとつが独立し、分離し、それ一つで完結する特性を持つ。長さも技法も主題も内容も、ばらばらであって良いし、むしろ、そのほうが変化と多様さに富み、面白い。ラ・ロシュフコーは、書くときにはその自由を存分に行使したが、一方、本にまとめるに際しては、集としての構成を考え、箴言を有機的組織的に統合するため、強い求心力を働かせた。『箴言集』初版は、さながらオーケストラのように、さまざまの異なった楽器が一つのタクトのもとに統率され、人間について見事なシンフォニーを奏でるに至った。

一つひとつの箴言は、独立し、分離した〝点〟にすぎなかったが、それらが集められ、並べられ、一定の距離を置いて眺めると見事な〝絵〟になっていた。まるで分割描法でえがかれた点描画のようであった。点を集めて線とし、形（かたち）を作り、自己愛というこの把え難い巨像を写し出すのに成功していた。それはまた、石や貝殻やガラスなど雑多な素材を散りばめたモザイクにも似ていた。色や形や大きさは、近くで見るとてんでんばらばらだったが、遠くから見ると立派な絵に仕上っていた。『箴言集』初版は、長さもテーマも技法も違う箴言群を一つにとりまとめ、それらの総和でもって人間という巨像に迫る壮大な試みなのであった。

（未　完）

注（1）Dreyfus-Brisacは、フロンドの乱の勇将であったラ・ロシュフコーを想起しながら、同一テーマの繰り返しによる集中攻撃を"ordre de bataille pour triompher des résistances de l'ennemi"「敵の抵抗を打破する戦いの布陣」と呼んだ。(Dreyfus-Brisac: *La Clef des Maximes de La Rochefoucauld*, P.P. 28～29)

(2) 死をめぐる省察は初版で初めて巻末に据えられたが、これ以降決定版に至るまで位置を変えることはなかった。ただし、初版においてはまだ番号は持たず、いわば別格扱いであった。番号がつけられたのは二版以降である。いずれにせよ、この省察は箴言群全体を総括する重要な役割りを担っていた。

(3) なるべく集にまとまりを与え、統一をもたらそうとする配慮は、細かい用語にも表われている。例えば **la philosophie**（哲学）、**les philosophes**（哲学者たち）という語の用い方について、トリュシェは次のような指摘を行っている（《**Ed. de Truchet**》, **P. 161, Note 1**）。M.P.3 の箴言は初版から削除されたが、その理由は、この箴言においてだけ〝哲学者たち〟という語が肯定的に使われているからだ。ちなみに、他の全ての箴言において、この語はストア派哲学者の自尊心をやっつけるために、専ら負の価値を担って用いられている。